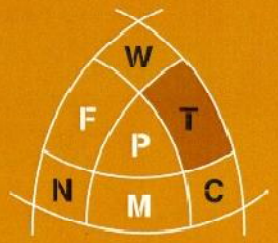
村を探索し、地図を描く

T1

■ 基本学習プログラム思索（T）

自然の中に築かれてきた人々の営み、文化誌（C）を学び、
より深く自然誌（N）を理解し、世界観（W）を深める教材です。
個別の現地実習にあたってはワークシート、調査用紙などを用意します。



井村礼恵（植物と人々の博物館プロジェクト）
中込卓男（町田市立大戸小学校）

index

1. 聞き取り調査
2. むらの地図づくり

1. 聞き取り調査

聞き取り調査とはフィールド・ワークの手法のひとつ（聞き取り調査、参与観察など）で、人類学、社会学、民俗学、民族学など様々な分野において、行われている調査方法です。

問題設定　⇒予備調査と文献研究　⇒仮説だて
フィールド・ワーク　⇒データ収集　⇒データ分析

聞き取りをした上で、さらに、質問紙によるアンケート調査を行って、その結果をもとに、数量的な分析と、補足の聞き取り調査を行う方法もあります。

（1）必要な道具
・フィールド・ノート（野帳）
なぐり書きでもよいので、その場でメモをとります。雨などの水分に強く、表紙が硬く書きやすいものが使いやすいです。図なども書き込みやすいものがよく、方眼があればスケールにもなります。
・名刺
自分の所属を伝えることで、こちらの調査目的を理解してもらいやすく、もしかしたら、後から思い出したことを連絡してくれることがあるかもしれません。
・カメラ
記録用。後から、その画像を見せて、別の人に聞き取りを進め、情報の正確さを深めることもできます。

※参考文献・資料
1.
コットン, C.M. 2004 民族植物学―原理と応用 （木俣美樹男・石川裕子訳） 八坂書房
上野和男・高桑守史・野村純一・福田アジオ・宮田登編 1978 民俗研究ハンドブック 吉川弘文館 東京

2.
「まちづくりゲーム 環境デザイン・ワークショップ」 ヘンリー・サノフ 小野啓子訳 （1993）晶文社
「発想法 創造性開発のために」 川喜田二郎 中央公論社
「民俗調査ハンドブック」上野和男（他）編（1987）吉川弘文館

・地図

フィールド・ワークでは、調査者自身の位置の確定と、聞き取り調査の中でできた地名をその場で確認するために、地図を持ち歩くことが必要です。地図に書き込みをしていくデータ記録方法もあります。

・フィールドを歩く上で必要なもの

雨具、携帯食、水筒、公共交通機関時刻表など必要に応じて用意します。

ビデオカメラや音声レコーダーは、基本的にお奨めしません。なぜなら、調査後のテープ起こしに時間がかかることと、後から音声記録を聞けばよいと思ってしまいがちなためです。話し手（インフォーマント）も言葉を選ぶので、録音によって本音を聴くチャンスを逃すこともあります。使用する場合は、必然性がある時のみ、了解を得てから行います。

※どこで、どのようなチャンスが得られるかわからないため、聞き取り調査道具一式は常に持ち歩くべきだと思います。

▲ 軒先に干した雑穀を写す

▲ 山村集落の道は坂が多い

(2) 聞き取り調査の導入

聞き取り調査は、常に「一期一会！！」、「今度また」はもうないかもしれない。

・事前準備としての文献調査

町誌・村誌のような地域の郷土資料

現在の地域紹介資料（観光資料等）

毎回の調査において、今回は、これとこれを明らかにすると項目で言えるように自分の目標をたてます。ただし、初めてフィールドに入った時の感触・感覚は大事にして、初回の調査日に凝り固まった調査表を用意しなくともよいでしょう。具体的な調査表を作成するための準備としての予備調査を行う必要があります。

山村において、役場は大きな窓口です。まずは、資料入手やインフォーマントになりそうな人を紹介してもらうため、調査のたびに顔を出しておくと、情報が得られることが多々あります。また、民宿なども観光客などに地域の説明をすることに慣れているので、最初のインフォーマント探しには、かなり助けになることが多いです。

とにかく、歩いて自分の目で見ることが第一です。時間が許すのであれば、公共交通機関を使い、自分の足で歩く方が、見たり、聞いたり、体感したりするチャンスが増えます。

(3) フィールド・ワークの心得

原則「郷に入っては、郷に従え」

インフォーマントや地域からの信頼関係を築けるよう最善を尽くします。

→ 特別なことではなく、挨拶などの基本的なコミュニケーションが大事です。

話し手は調査につきあわなくてもよいのに、つきあってくれているのです。謙虚な気持ちを忘れずにいましょう。

小さなコミュニティの場合、親戚関係が広いので、絶対に地域の人の「個人的なこと」、ましてや「悪口」を言ってはいけません。人間関係を壊します。誰が誰とつながっているのかわからないものです。

「交換の法則」を忘れず、お礼をします。労働力や物などもありますが、事後の礼状が大事です。数回の調査が可能であれば、前回お世話になった方に、挨拶がてら、お礼の品（高価ではない気持ちが伝わるもの）を持って、訪ねるとよいと思います。

異性に対しての配慮として、一人暮らしの人の自宅を訪ねる場合は、時刻等意識することです。小さなコミュニティでは、何時から何時まで、誰が誰と会っていたなどという話になり、相手に迷惑をかけることもあります。必要な場合は、誰かに紹介をされてから訪ねるのも対処のひとつです。

(4) 聞き取り調査の方法

うまく話を聞きだす方法は基本的にはありません。あえてあげるとすると、

①調査者の経験が全てだが、地域に足を運ぶ回数を重ねること。

②最初に、ちゃんと目的と聞きたいことを伝えること。

－経験から、ご参考まで－

目的を伝えた上で、基本は話し手（情報提供者、インフォーマント）に話をしてもらい、自分がもともと用意している質問に近い話になったら、突っ込んでみます。「そういうことが知りたかったんですよ。」と嬉しそうに質問を進めれば、相手もそうかそうかと答えてくれることが多いです。

聞き取り調査は、良い意味での探りあいによる協働作業です。相手もこちらのことを、何が知りたいのかと探っているのです。協力してもらうには、こちらの意図をちゃんと伝えることが重要です。

できるだけ対象者に近しい心情で、かつできるだけ調査者として第三者的な客観的視点を持って進める必要がありますが、これができそうで、とても難しいのです。

気になるキーワードがあった場合は、オウム返しをして、さらに話をしてもらうようにすると良いでしょう。こちらから、先まわして、誘導しないように心がけることが重要です。例えば、地方名があるものでも、調査者が先に名前を口に出してしまうことで、地方名を知るチャンスを逃してしまうことがあります。

感想や意見、認識等で、仮設と異なる回答を得た場合、理由を尋ねることで、その言葉を正しく解釈ができるようにします。

(5) データの記録方法

メモには、必ず調査日と調査場所、対象者とその年齢を書き込みます。「子どもの頃には～」という表現があった場合に、その年代が特定できるためです。「昔は～」という場合も、年代の特定はその場でしておくことです。

データの解釈は、調査者によるもの。だからこそ、聞き取りデータは大事に扱い、気軽に勝手な分析をしてしまわないように、基礎的文献調査や他の地域との比較が重要です。

後から、ニュアンスが変わってしまうことを避け、調査者が勝手な解釈をしてしまわないように、言葉をそのままメモすることも重要です。特に相手の考えや思いを聞き取りたい場合は、そのまま記録すべきです。

話し手が自分のことではなく、他人のことを教えてくれた場合は、その人の主観が入っているので、参考情報として受け取るようにします。データとするには、本人への聞き取り調査を行うべきです。すでに亡くなった方の場合は、その家族など近しい関係の人に聞き取りを行うと良いでしょう。

・調査者の主観的な記録をメモする場合は、その根拠も書き加え、話し手からの聞き取りデータと混ざらないようにしておかねばなりません。

(6) 調査終了後のデータ整理

聞き取り調査でフィールド・ノートにメモしたものは、できるだけ早めにパソコンに打ち込むか、ノートに整理しておきます。時間がたつと、記憶も薄れて折角とった記録も整理しにくくなり、正確さを欠きやすいものです。

・KJ法 （川喜田二郎の発想法）

→ ばらばらに存在する事象の関係性を見出し、全体像を仮定してみます。

→ 柳田國男も調査データの整理にこの方法をとっていました。

(7)「のびと」としてのフィールド・ワーク、
聞き取り調査のすすめ

民族植物学、民族生態学などの自然誌と文化誌が複合された視点を持って、調査を進めましょう。地域住民が自然をどう認識し、利用してきたのかを明らかにすることを目的として、聞き取り調査を行います。そして、調査結果から得られた伝統的な智恵や世界観を、私たちは体験学習にどう活かすことができるのか考えたいと思います。

↓

フィールドに対するスタッフ自身の認識形成の過程でもあり、プログラムづくり、講師選出等の基礎となります。

（井村礼恵）

2. むらの地図づくり

環境学習を行う場所である村の概略を知るために、まず行いたいのは概念図作りです。尾根に登り、沢を下ってみて、また、村中を歩き回り、自然環境と村の立地を把握します。

(1) 学習目的・目標

村内を歩き回り、気づいたことや、興味をもったことなどいろいろな路上観察の情報を白地図に書き込みます。観察する力を鍛えることができ、村の中身を知る前提情報の1つになります。また、観察情報を書き込むことによって自然と人とのかかわり方について自分なりの見方（仮設）をもつことができます。

さらに、実際のフィールド・ワークの継続を通して、その地図にさまざまな種類の情報を書き込むことで、村の全体像や過去、現在、未来を考え、エコミュージアムの基礎資料を作っていきます。

［キーワード］ 景観、土地利用、民俗、神社仏閣、社、畑(作物)、祭り、自然環境への人の影響、住空間、公園、昔、現在、未来(時間軸)、歴史、観察力、洞察力、情報の統合、エコミュージアム

(2) 基本学習概要

実施場所：町、都市、村　4キロ四方ぐらいの場所

活動時間：活動に要する時間
（朝夕や春夏などの時間帯・時季なども含む）

対象・人数：流動的

装　　備：2万5千分の1の地形図、
フィールド・ノート、イラスト・マップ、
白地図、筆記用具、
住宅地図（縮尺1/1000から1/2000)、
コンパス（方位磁針)、バインダー、色鉛筆、
デジタルカメラ、スケッチブック

(3) 学習内容

①これから調査する場所の白地図を用意します。市販の2万5千分の1の地形図が基本です。住宅地図（縮尺1/1000から1/2000）があればさらに記入しやすくなり便利です。あらかじめ役場や観光協会等でむらの地図を問い合わせてみます。このときに村史や民俗調査の報告書等参考になるものがあったら見せていただきましょう。

②参加者それぞれがバインダー・ボードに白地図をつけて、野外を歩きます。あらかじめ1、2時間のコースを決めておき、コースをたどりながらさまざまな情報を書き込んでいきます。このときに面白いと思ったものをデジタルカメラで撮影しておくとまとめのときに便利です。時間に余裕があればスケッチしてみるとさらにいろいろなものが見えてきます。

③参加者が自分で面白いと思い、興味関心があるもの、不思議に思ったこと、重要だと思うものを書き込んでいくのが基本です。さらに、次のような物事があったらぜひ書き込んでおくとよいと思います。

- 神社、社、お寺
- 畑（どんな作物を育てているか）
- 庚申塔、馬頭観音、道祖神等の信仰に関わる石碑
- 古い建造物
- 用水路、井戸、池
- 学校等村に重要だと思われる建物とその場所
- 商店（何を売っているのか）、製作所等
- 自分が気に入った場所
- その他、自分が興味を持ったもの、なんだろうと思ったもの

④まとめを行います。室内に戻り他の人との情報を交換したり、話し合ったりしてみます。
その際さらに地図に書き込むとよいでしょう。フィールドで使った地図とは別に新たに書き直してもいいでしょう。

［注意・留意点］村を歩いていて、地元の人に出会ったらいろいろ話を伺って見ましょう。ただし、とても忙しそうだったらまたの機会にするようにします。その見極めが肝心です。

(4) 活動展開事例

村でなく町や都市でも地図作りを行い、村と比較して自然環境に人間がどう影を与えているかという視点で、土地利用、住宅の場所、景観、植物の種類の違いや面積、道路の作り方、水路、川の違い、動物の種類や生息数、遊び場、公共施設等を見てみましょう。

季節による違い、祭りなどテーマごとに地図をまとめても面白いでしょう。

昔の地図が入手できたら現在と比較してみましょう。また将来どうしたらいいか考えて見ましょう。調査結果に基づき、解説、学習案を作ります。

（中込卓男）

▲ むらの地図づくり
各自が白地図に調査してきたことを書き込んだものについて、話し合っているところ